演劇

「ミステリア・ブッフ」（TPT）

島田麻未撮影

観客巻き込む楽しさを

世界各地から十四人の「きれいな人」が南極に集まっている。世界は水に沈み、支配者階級の生き残りである彼らは、十四人の「きたない」労働者たちに方舟をつくらせ、新天地を目指す。方舟の食べ物を「きれいな人」が食べ尽くしたために革命が起き、労働者たちは彼らを追い出すが、相変わらず食べ物はない…。

ミステリア（聖史劇）とは、キリストの受難を中心に聖書の出来事を描いた中世の芝居で、そこにはキリストが地獄の人々を解放し、復活して天国にのぼる場面も含まれる。『ミステリア・ブッフ（滑稽聖史劇）』はそのパロディーになっていて、飢えた労働者たちはまず地獄に、それから天国にたどり着くが、そのどちらにもおさまらずに前進を続ける。彼らを最後に迎えるのは、ものが豊かにあふれ、人が自由に働き自由に受け取ることが出来る世界だった。

一九一八年に初演され大当たりをとったマヤコフスキーの原作は、社会主義の希望、単純な図式、美しい詩、楽しくて奇抜な見せ物舞台のごった煮だ。そこでは革命の演劇と演劇の革命とが密接に結びついていた。

この作品を上演するときには「自分の時代」に合うように変えることをマヤコフスキーは望んでいた。私たちはソ連の体制がどんな悲惨を招いたのかを知っているし、搾取がなくなっても環境破壊は単純には解決されない。演出（木内宏昌）はそのように考えたのだろう、悲観的な要素の強い上演になった。開演前にロビーでパフォーマンスをおこない、本番では客席で舞台を挟むといった工夫をしたのだから、もっと観客を巻き込んで、原作の奇抜な楽しさをいかすことが出来れば良かったのだが。

（北野雅弘・演劇学研究者）

東京・ベニサン・ピットで、31日まで